

大伴坂上郎女「怨恨歌」攷

著者	大濱 眞幸
雑誌名	國文學
巻	64
ページ	1-11
発行年	1988-01-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/5652

大伴坂上郎女「怨恨歌」攷

大 濱 眞 幸

一

大伴坂上郎女の怨恨の歌一首 井せて短歌

おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして 年深く
長くし言へば まそ鏡 磨ぎし心を 許してし その日の極み
波のむた なびく玉藻の かにかくに 心は持たず 大船の
頼める時に ちはやぶる 神か放けけむ うつせみの 人か障
ふらむ 通はしし 君も来まさず 玉梓の 使ひも見えず な
りぬれば いたもすべなみ ぬばたまの 夜はすがらに 赤ら
ひく 日も暮るるまで 嘆けども 験をなみ 思へども たづ
きを知らに 幼婦と 言はくも著く たわらはの 音のみ泣き
つつ たもとほり 君が使ひを 待ちやかねてむ

(四一六一九)

反歌

はじめより 長く言ひつつ 頼めずは かかる思ひに 遭はま
しものか (六二〇)

右の二首(以下、一括して本歌と略記する)は、大伴坂上郎女の所謂「怨恨歌」として知られる歌である。

これまで本歌は、その全体的印象・「怨恨」の対象・六朝詩の影響・表現手法・制作意図等様々な視点から論じられてきた。例えば、本歌全体の印象については、そこに八切実な怨恨の情 \vee を認めようとする説 $\textcircled{1}$ に対して、近年では、八情熱の欠如 \vee を指摘する向き $\textcircled{2}$ が多い。また、「怨恨」の対象については、

(1)大伴宿奈麻呂八代精・略解・新考(井上氏)・全釈・若山喜志子氏 $\textcircled{3}$ \vee

(2)藤原麻呂 八坂証・評釈(金子氏)・評釈(窪田氏)・増

訂版全註釈・私注・藤原芳男氏 $\textcircled{4}$ ・注釈 \vee

(3) 大伴駿河麻呂八尾山篤二郎氏⑤

(4) 大伴家持 八橋本達雄氏⑥・寺田透氏⑦

等、特定の人物に比定する説が唱えられていたが、最近では本歌の表現の曖昧さを根拠に、特定の人物に絞ることに無理があるとする考え方が支配的である。その結果、本歌の制作意図についても八虚構説⑧△代作説⑨△題詠説⑩等が行われ、本歌に何らかの意味での虚構性を認める方向が定着している。

以下、本稿では、本歌の制作意図について、こうした先行諸説に導かれながら、主として長歌の「ちはやぶる 神か放げけむ うつせみの 人か障ふらむ」及び、長反両歌に詠まれた「長く」という表現を考察し、本歌に詠まれた男女の姿を検証することを通して、従来の説とはいささか異なった解釈を提出してみたい。

二

「ちはやぶる 神か放げけむ うつせみの 人か障ふらむ」なる対句表現（以下、本句と略称する）は、長歌の構造上、これに続く「通はしし 君も来まさず 玉梓の 使ひも見えず なりぬれば」と詠まれた、作中の女性に突然訪れた別離に対する「原因究明のための並立挿入句」⑪と考えられている。しかし、本歌が、「怨恨歌」

なる題詞の下に詠まれているにもかかわらず、その対象が判然としないことの理由を本句に求めた小野寺静子氏が、

怨恨という感情には、恨みの相手の動作に対して、神や人などさしはさむ余地などないもので、恨みの対象そのものへ強く向ってゆくはずのものである、しかるに郎女は、……中略……神や他人にその責を求め、怨恨の対象者に対しては極めて寛大なのである。……中略……対象に怨恨の情が据えられていないということは、たださえ対象は誰であるか明らかでないものに、いっそう対象の漠然性ということを感じさせるものである。

と述べた⑫如く、その表現上の評価は、余り芳しいものではない。しかし、果たして本句は、かかる評価しか得られない表現なのだろうか。と言うのも、坂上郎女は、本歌に様々な技巧を凝らし⑬、その完成度を高めようとしていることが窺えるからである。

例えば、本歌の別離は、主人公たる女性が、「ねもころに」「年深く 長く」と、言葉巧みに言い寄った「君」の求愛を許し、「大船の 頼める時に」突然訪れた、と描かれている。つまり、女が、別離という事態に対してまったく無防備な「時」が設定されているのである。かかる「時」の設定は、小野寺氏や駒木敏氏も指摘⑭する如く挽歌の手法を援用したものであり、この点に私は、本歌の予期せぬ別離と、その後の女の悲嘆を際立たせんがための、作者坂上

郎女の周到な配慮を見出すのである。

かかる坂上郎女の手際の良さを思えば、怨恨の対象を漠然とさせると難じられている本句にも、その漠然とさせているということ自体に、これまで看過されてきた、本歌の完成度に深く関わる郎女の意図が隠されていると考えるべきであり、その漠然化の意味を問うてこそ、本句の、延いては本歌の作意に迫り得よう。

本歌の別離は、当事者たる「君」はおろか、二人の間を取り持っていた「使ひ」さえも訪れなくなるといふ事実によって、女に告げられる。しかし、もしかかる別離が、その原因に関わる表現を一切持たないままに詠まれていたならば、それはあまりにも唐突に過ぎるのであろう。それ故、「原因究明」の表現は、その内容はともかくとして是非とも必要な表現だったと思われ、この点にひとまず本句の詠まれるべき必然性は見出される。

では何故坂上郎女は、その別離の原因に、当事者ならぬ第三者を詠んだのだろうか。その理由は、先にも触れた、別離に至るまでの男に対する女の思いの中に見て取ることができる。つまり、女は、男の求愛を受け入れた後、「かにかくに 心は持たず」ひたすら男を信じ頼りにしていたと詠まれていた。かかる男への思いが、別離の後も持続されていてこそ、女の悲嘆は、その切実さを際立たせることができる。しかしそのためには、別離の原因が、「何処までも

男の本心からではないやうに」^①詠まれる必要があるであろう。でなければ、女の思いの一端さが色褪せてしまうからである。とするならば、二人を引き離す原因は、当事者以外に求めざるを得ないことにならう。即ち、坂上郎女は、別離の原因を第三者に求めることで、そうした事態に直面してもなお男を慕い続ける女の姿を浮き彫りにし、その後の女の悲嘆を際立たせようとしたのである。このことはまた、本歌、特に長歌の表現のあり様を考える上で重要である。つまり本句が、かかる女の姿を伝えるが故にこそ、それ以降の表現が、男へのあらわな「怨恨」の情ではなく、去って行った男をなおも慕う女の嘆きを歌い、「君が使ひを待ちやかねてむ」なる男への未練で歌い納められていること等、「怨恨歌」なる題詞にそぐわない表現で占められていることも、長歌自体の結構としては、極めて自然に受けとめることができるのである。

それにしても、坂上郎女は、別離の原因としての第三者を、何故「神」や「人」なる語で表わしたのだろうか。以下、この点について述べてみたい。

まず、本句に詠まれた「神」を原因とする別離とは、小野寺・駒木西氏^②及び「全注」(木下正俊氏)が、

…… こと放けば 家に放けなむ 天地の 申し恨めし 草枕
この旅の日に 妻放くべしや …… (十三—三三四六)

なる挽歌を挙げて説いた「不可抗力」(小野寺氏)の別離、即ち△死別▽を意味している。この△死別▽という別離は、いかなる意味においても修復不可能な別離である。つまり、本句の「神」は、別離の最悪の場合を描出する語だったのである。

次いで、男女の別離に「人」が関わる場合とは、

恋死なむ そこも同じそ 何せむに 人目人言 ちちたみ我せむ
(四一七四八)

という家持の歌に端的に表わされているとおり、恋の障害の常としての「人目人言」を指す。その「人目人言」を原因とする別離とは、言うまでもなく当事者の周囲の人々の干渉や反対による生きながらの別れ、即ち△生別▽を意味している。

伊藤博氏の調査によれば①、「人目」や「人言」に関わる歌は、約一八〇首の多きを数え、かかる障害が、当時の恋する男女にとってもっとも警戒すべき障害であったことはよく知られている。つまり、恋を阻むものと言えば直ちに想起される障害が、かかる第三者の「人目」や「人言」だったのであり、それ故にこそ「人」なる語は本句に詠まれたのである。

以上の如く、本句に詠まれた「神」と「人」を原因とする別離を突き詰めていくと、△死別▽と△生別▽という別離のあり方が立ち現われてくる。しかし、別離のあり方と言っても、そこに至る個々

の事情は様々であろうが、所詮はこの△死別▽と△生別▽の二つ以外にはあり得ない。即ち、坂上郎女は、本句に「神」と「人」という第三者を詠むことで、別離のあり方のすべてを描き出していたのである。しかし、それがために、結局その原因は、特定されないうまに終わる。つまり、本句は、本歌の怨恨の対象はおろかその別離の原因についても漠然とさせるという機能を有していたのである。

別離の原因の特定が、怨恨の対象の特定に直結するとすれば、逆にそうしたことのすべてを漠然とさせる本句の機能は、本歌の別離を特定し得る個々の事情を払拭しようとする、坂上郎女の意図の存在を示しているよう。即ち、坂上郎女は、本句に「神」や「人」なる語を詠み、別離のあり方のすべてを織り込むことで、逆にその原因を意図的に膿化しようとしていたのである。

三

ここでは、本句の「神」と「人」が意味した△死別▽と△生別▽とを坂上郎女の経歴に探り、また、本歌の女性の年齢的な問題をも絡めて、本歌の別離を特定し得る要素を明確にしないでおこうとする郎女の意図を、その実人生の面からも跡づけてみたい。

まず△死別▽についてみると、郎女の経歴から明らかなように、

その初婚の相手である穂積皇子と、大嬢・二嬢という二人の娘を儲けた大伴宿奈麻呂が挙げられる。穂積皇子は、和銅八(七一五)年に薨じ[㊤]ており、また、大伴宿奈麻呂は、神龜五年までに没した[㊤]と考えられている。つまり、坂上郎女と確実に婚姻関係にあったと考えられるこの二人との別離は[㊤]八死別[㊤]だったのである。

次いで、[㊤]生別[㊤]について考えてみると、藤原麻呂の存在が浮上してくる。神姫忍氏[㊤]は、麻呂と郎女の贈答、即ち「京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首」(四一五二一四)と「大伴郎女の和ふる歌四首」(五二五七八)を精査し、従来疑問を持たれることさえなかった二人の婚姻関係を否定し、その理由として、麻呂の妻問いに對する大伴氏内部の反発、特に坂上郎女の母、石川郎女の反對を想定した。即ち、坂上郎女は、周囲の干渉つまりは周囲の「人目人言」によって麻呂との関係を断つことになったのである。つまり、坂上郎女と麻呂との別離は、[㊤]生別[㊤]だったと考えられるのである。

以上、本句に詠まれた[㊤]生別[㊤]と[㊤]死別[㊤]とは、ともに坂上郎女の実体験の中に見出すことができる。しかし、そこに登場する人物は、「天平三年迄に郎女と関係のあつた男の全て」[㊤]に互っている。本歌の作歌年次は、天平三年から五年の間と考えられている[㊤]が、坂上郎女は、それまでの男性体験において、既に[㊤]死別[㊤]と[㊤]生

別[㊤]の両方を身をもって体験していたのである。従つて、本歌に郎女の別離の体験が投影されていることは認めてもよい。つまり、本句の表現は、郎女の体験をその背景に持つてはいる。しかし、その体験が、[㊤]死別[㊤]と[㊤]生別[㊤]の双方に互るが故に、本歌の「君」を特定する根拠にはなり得ない[㊤]。このことは、坂上郎女が、自己の別離の体験すべてを本歌に投影することで、逆に「君」なる存在が具体的に特定されないように配慮していたことを示すものであろう。

一方、本歌の女性の場合、「幼婦」の原義を「幼な妻」とした橋本達雄氏の見解[㊤]や、また、「幼婦」との意味的関連から「磨きし心」を、「特定の男性を迎え入れる以前の若年の女性のもの」とした駒木敏氏の見解[㊤]を思えば、先にも記した本歌の作歌時期における坂上郎女の年齢が、三一歳から三三歳[㊤]であつたことからして、本歌の主人公たる女性は、郎女自身ではあり得ないことになる[㊤]。つまり、本歌の女性も、具体的に誰とは名指しできない存在として描かれているのである。この点に関しては、本歌が、「我」なる語を持たない特異な相聞歌であるという、川口常孝氏の指摘[㊤]は示唆的であると言えよう。

即ち、本歌に登場する人物は、坂上郎女の実人生の面から見て、男女ともに特定の人物に絞り得ないように詠まれており、この点からも、本歌の別離を特定し得る要素を漠然とさせておこうとする、

郎女の意図の存在を窺い知ることができるのである。

四

本歌の登場人物に対する従来の考察は、作者坂上女郎や本歌の主人公たる女性に関するものが主であり、男性が論じられるのは、専ら「怨恨」の対象を考察する場合に限られていた。しかし、そうした論考には、かかる別離を引き起こした「君」なる男性が、如何なる存在として描かれているか、という視点が欠落していると思われる。それ故、ここでは、従来あまり説かれることのなかった、女性の許から去って行った男性の性格を検討することを通して本歌のあり方を探ってみたい。

本歌に詠まれた男性は、「年深く 長くし言へば」(長歌)・「初めより 長く言ひつつ」(反歌)と長反両歌に詠まれた「長く」という語にその性格が象徴的に描かれていると思われる。

この「長く」という表現が、女性の心を得んがための口説き文句であることは改めて指摘するまでもない。しかし、その解釈は、

A 言い寄り始めてからの時間の長さを言う

△攷証・新考(井上氏)・評釈(金子氏)・評釈(窪田氏)・私注・新潮古典集成本▽

B 行く末長く心变りの無いことを言う

△略解・古義・全釈・大系本・注釈・古典文学全集本・全訳注・全注(木下正俊氏)▽

のように大別されており、現在に至るまでその対立は続いている。

集中の男女の間に交わされた「長く」について見ると、

狂言か 人の言ひつる 玉の緒の 長くと君は 言ひてしもの
を (十三―三三三四 挽歌)

の如き例が見出せる。この歌は、命ある限り「長く」と言いながらも先立ってしまった夫の言葉を妻が思い起こすことで、その言葉とは裏腹な現実を嘆いているのである。この場合の「長く」が、Bの立場から詠まれた表現であることは動かないであろう。また、「長く」という語こそ詠まれてはいないものの、

天地と いふ名の絶えて あらばこそ 汝と我と 逢ふこと止
まめ (十一―二四一九 寄物陳思)

ひさかたの 天つみ空に 照る月の 失せなむ日こそ 我が恋
止まめ (十二―三〇〇四 寄物陳思)

わたつみの 海に出でたる 飾磨川 絶えむ日にこそ 我が恋
止まめ (十五―三六〇五 追新羅使歌 当所詠詠古歌)

の如き諸歌は、永久に途絶えるはずのない「天地」「月」「飾磨川」に寄せて、それが絶えた時相手への思いも終わると述べ、末長く心

変わりのないことを保証することで相聞として機能している。これらの歌は、そこに「長く」とはないものの、その発想としては、Bの立場からのものと見てよい。さらに坂上郎女自身にも、

千鳥鳴く 佐保の川門の 瀬を広み 打橋渡す ^{△長くと思へ} 汝が来と思へば [▽]

(四一五二八相聞)

恋ひ恋ひて 逢へる時だに 愛しき 言尽してよ 長くと思はば

(四一六六一同右)

という歌がある。これらの歌が現実の恋を詠んでないとしても、ここに詠まれた「長く」が、未来にかけての表現であることは明白であり、これまたその発想は、Bの立場からのものである。

つまり、恋の場における「長く」という表現は、相手への思いが未長く変わらなことを保証しようとする表現としてある。従って本歌の「長く」も、Bの立場から解釈すべきであろう。即ち、本歌の「長く」は、そこに詠まれた初心な女を我がものにせんとする男の、いつまでも私の心は変わらないよと、女の先行きの不安を打ち消そうとする表現として詠まれているのである。

ところで、こうした男の口説き文句は、先掲の寄物陳思歌や道新羅使歌に、直接「長く」とはないものの、未来にかけて心変わりのないことを、物に寄せて具体的に保証しようとした歌々の存在が示すとおり、恋愛における男の口説きの常套文句と考えてよい。つま

り、この「長く」という語は、女の心を得ようとする時の手管として、すべての男が言いそうな言葉だったのである。従って、本歌の「長く」の場合も、取り立てて言うほどの特別な表現ではなく、むしろ、一般的な口説き文句が詠まれているに過ぎない。それ故、本歌に登場する男性から個性を見出すことはできないのである。つまり、本歌の「君」なる男性は、坂上郎女の実人生から考えても、また、本歌の表現のあり方から見ても、具体的な像を結び得ないように配慮されていると考えることができよう。

即ち、この点に既にして、本歌の別離の道具立てを漠然とさせておこうとする、坂上郎女の意図が看取されるのである。

五

本稿がこれまで論じて来たことは、本歌の別離に現実味を付与し得る、その原因や登場人物等の、別離の道具立てを極力明確にしな

いでおこうとする坂上郎女の意図の存在であった。即ち、本歌に、
A 別離のあり方のすべてを象徴する△死別▽と△生別▽を詠み込むことで、逆にその原因を漠然とさせていたこと。

B 別離の根本人たる男が、女性の関心を引こうとする男性一般としてしか描かれていないこと。

C 坂上郎女自身の別離の体験の投影は認められるが、その美人
生からは男女ともに特定されないように配慮されているこ
と。

の如くである。

かかる不鮮明な要素を本歌から捨象すると、そこには、突然訪れ
た別離と、それ故に日夜嘆き暮らすうら若い女性の姿の二点が大写
しにされてくる。しかし、この女性にしても、個性的に描かかれて
いるとは言いがたい。つまり、駒木敏氏^⑧が、

表現の端々に三〇歳を越えた作者の体験的思いを播曳させてい
るものの、まだ恋の道を知らぬ女性が「ねもころに」「年深く
長く」と言いよってきた男性に身をゆだね、いくばくもなく離
れていった男を怨み、無効と知りつつ男の便を待ち嘆く「幼婦」
像として結ばれてくるのである。

と説いた本歌の女性像は、そうした体験に乏しい年若い女性一般の
姿でしかない。即ち、坂上郎女は、本歌の登場人物や別離の原因と
いった、その別離を特定し得る要素のことごとくを、具体的に把握
できないように表現していたのである。

本歌は、その「リアルさの欠如」^⑨・「迫真性のなさ」^⑩が指摘さ
れているが、その真の理由は、坂上郎女によって意図的に払拭され
た、かかる別離に関わる要素の不鮮明さにこそ求められるべきだっ

たのである。

では何故坂上郎女は、本歌の別離からその具体性を消し去ったの
であろうか。この問題を、郎女の文芸意識の面から捉えるならば、
遙か筑紫の地で、旅人や憶良達が志向した、やまとうたと中国文学
の融合という新たな文学を自らも試みんとした郎女が、その題材
を恋に求め、「玉台新詠」の「怨詩」^⑪等に学び、女性の立場から
男女の別離を詠み、そこに、別離に関わる事情を具体的に描かない
ことで、特定の男女の別離の歌としてではなく、男の求愛に心を許
し、それ故に涙を飲んだ、すべての女の思いを描き出そうとした、
ということにでもなろうか。

しかしそれにしても、かかる特異な歌が創出されるには、やはり
坂上郎女をとりまく環境の中に、それを生み出す直接的な契機が存
在していたはずである。この点に関して想起されるべきは、早く橋
本達雄氏が、「幼婦」なる表記に着目して説いた、坂上郎女の愛娘
坂上大嬢の存在^⑫であろう。

神堀忍氏によれば^⑬、本歌の作歌年次たる天平三年から五年まで
の大嬢の年齢は、十歳から十二歳位と考えられる。一方、「戸令」
の規定では女性の結婚は十三歳から許されている。また、坂上郎女
自身も、十三歳位で稗積皇子と結ばれている。とするならば、既に
大嬢は、結婚を意識し始めても不思議ではない年齢に達していたと

考えることができよう。かかる年齢に達した大嬢の存在が、本歌の制作に大きく関与しているのではなからうか。

この時期の坂上郎女が、幼くして父を亡くした、十代前半の多感な年頃に成長した大嬢や、年齢的にあまり離れていなかったと思われる二嬢姉妹の養育に腐心していたであろうことは想像に難くない。その最大の気がかりは、当然のことながら彼女達の結婚問題だったはずである。本稿は、こうした母としての坂上郎女と娘達とを取り巻く事情を、本歌制作の契機と考えてみたいのである。

坂上郎女は、思春期を迎えた娘達を日頃眺めるにつけ、自分が人を愛し始めた頃の年齢に娘達が近づいて来たことを否応なく知らされたことであろう。まだ真に恋の痛みを知らぬ娘達の言動の端々に、異性に対する無垢な憧れを見出した坂上郎女が、決して幸福とは言えなかった自らの恋愛や結婚の結末を投影し、娘達に△別離の模擬体験▽としての意味を込めて示したのが本歌ではなかったか。

このように考えてこそ、坂上郎女が、本歌に企図した表現の二面性、即ち、別離の道具立てを具体的に描かないことで、その「リアルさ」や「迫真性」を拭い去ろうとした反面、別離という事態と、そうした事態に直面してもなお男への思いを断ち切れないうら若い女性の嘆きを際立たせていたことの意味を理解することができるだろう。

つまり、かかる本歌の二面性は、まだうら若い娘達に、現実の恋や結婚において起こり得る別離とその辛さを伝えると同時に、必要以上のおそれを抱かせないようにとの親心から、そうしたことの生しさを希釈して伝えたいという、坂上郎女の、母親としての二重の配慮から生み出されたものだったのである。

即ち、本歌は、坂上郎女が、思春期を迎えた娘達に、大人の世界を垣間見させ、「かかる思いに 遭」（反歌）うような羽目に陥らないように、△別離に対する女の心構え▽を教え諭し、また覚悟を促そうとした歌だったと考えることができるだろう。坂上郎女が娘達の結婚に積極的に関わったことはよく知られているが、本歌もまたそうした意味を担う歌だったのである。

本歌の制作意図を上記の如くに考えるならば、「離絶数年」（七二七廻下注）の後、現実の恋の相手として互いに意識し始めた、大嬢と家持の贈答に、「人目」や「人言」に関わる歌（七三〇・七三一・七三七 大嬢、七四八・七五二・七七〇 家持）が多い^⑨のも、それらが単に当時の一般的な恋の障害だったという意味以上に、その関係を大切に育もうとした二人の思いから出た表現であったことが理解されよう。即ち、「怨恨歌」に込められた母の願い、母の教えは、上述の意味において、二人の恋の成就に大きな役割を果たしたのであった。

注

- ①「全釈」・「総釈」(石井庄司氏)・若山喜志子氏「大伴坂上郎女」春陽堂版「萬葉集講座」1・藤原芳男氏「ねもころに君が聞こして―大伴坂上郎女私攷―」「萬葉」第二六号・久米常民氏「大伴坂上郎女」「日本女流文学史 古代・中古」。但し、後に疑問を提出。「大伴坂上郎女」「和歌文学講座5 萬葉の歌人」・「大伴坂上郎女の生涯と文学」「萬葉集の文学論的研究」。
- ②「評釈」(佐佐木氏)・「増訂版全註釈」・「私注」・古庄ゆき子氏「怨恨の歌―大伴坂上郎女の歌をどう読むか(一)―」「国文学研究」第七号(梅光女学院大学)・小野寺静子氏「怨恨の歌―大伴坂上郎女の志向する世界―」「萬葉」第七九号・橋本達雄氏「幼婦と言はくも著く―坂上郎女の怨恨歌―」「萬葉」第八四号。
- ③若山喜志子氏注①同論文。
- ④藤原芳男氏注①同論文。
- ⑤尾山篤二郎氏「大伴ノ坂上ノ郎女考」「大伴家持の研究」。
- ⑥橋本達雄氏注②同論文。
- ⑦寺田透氏「万葉の女流歌人」。
- ⑧小野寺静子氏注②同論文・伊藤博氏「天平の女歌人」「古代和歌史研究4 萬葉集の歌人と作品 下」・駒木敏氏「大伴坂上郎女の怨恨歌」「万葉集を学ぶ」第三集。
- ⑨橋本達雄氏注②同論文。また、「私注」もその可能性を示唆している。
- ⑩「萬葉集全訳注原文付」六一九番歌脚注。また、「私注」もその可能性を示唆している。
- ⑪日本古典文学全集本「萬葉集」1、六一九番歌頭注。
- ⑫小野寺静子氏注②同論文。また、橋本達雄氏注②同論文にも同様の指摘がある。
- ⑬本歌の表現技巧については、早く、「評釈」(窪田氏)が述べ、また、小野寺静子氏注②同論文や、駒木敏氏注⑧同論文も論じている。
- ⑭挽歌的手法の援用については、注⑬小野寺、駒木両氏の論に詳しい。また、本歌の「時」の意味については、浅野則子氏(「怨恨歌」試論)「国文目白」二三号)が、「怨詩」の形式との関連から論じている。
- ⑮「評釈」(金子氏)。
- ⑯小野寺静子氏注②同論文及び、駒木敏氏注⑧同論文。
- ⑰伊藤博氏「萬葉の恋」「萬葉集相聞の世界」。
- ⑱「続日本紀」和銅八年七月二十七日条。
- ⑲宿奈麻呂の没年については、(1)神龜元年「評釈」(金子氏)。(2)同二、三年内||尾山篤二郎氏注⑤同論文。(3)同五年||駒木敏氏注

⑧同論文。(4)神龟年中||小野寺静子氏注②同論文等がある。また久米常民氏は、神龟五年にはその関係が清算されていたとする。

(「坂上郎女の生涯と文学」『万葉集の文学論的研究』)。

⑨神堀忍氏「大伴家持と坂上大嬢―その年齢推定の試み―」『萬葉集研究』第二集。

⑩小野寺静子氏注②同論文。

⑪本歌の作歌時期については、(1)天平三年||四年||藤原芳男氏注①同論文・小野寺静子氏注②同論文・東茂美氏「『怨恨歌』論」『長崎県立国際経済大学・調査と研究』一六一一。(2)天平四年||五年

||橋本達雄氏注②同論文。(3)天平三年||五年||駒木敏氏注④同論文の三説あるが、本稿では、最大幅という意味で、(3)説に従った。

⑫本歌の「君」なる男性が具体的に特定できないことについては、小野寺静子氏注②同論文及び、駒木敏氏注④同論文にも説かれている。

⑬橋本達雄氏注②同論文。

⑭駒木敏氏注④同論文。

⑮天平三年||五年の坂上郎女の年齢を三十一||三三歳とするのは、その誕生を、大宝元(七〇一)年(屋歌頼雄氏「大伴坂上郎女」春陽堂版『萬葉集講座』1等)としたからである。

⑯本歌の女性が坂上郎女自身ではないことは、早く『全註釈』・『私

注』が示唆している。

⑰川口常孝氏「相聞と『我』」『解釈と鑑賞』三六卷十一号。

⑱駒木敏氏注④同論文。

⑲小野寺静子氏注②同論文。

⑳橋本達雄氏注②同論文。

㉑本歌における坂上郎女の文芸意識を「怨詩」から論じたものに、浅野則子氏注⑭同論文や、東茂美氏「『怨恨歌』論(承前)」『長崎県立国際経済大学論集』一八ノ三・四がある。また浅野氏は、本歌が平安和歌以降のうらみのうたに連なる質のものであることも論じている。(「うらみのうた―坂上郎女619・620番歌をめぐって―」『文学・語学』第113号)

㉒橋本達雄氏注②同論文。また駒木敏氏は、注④同論文において、本歌の女性と大嬢との重層性を論じているが、家持への代作歌とすることについては、疑問を提出している。

㉓神堀忍氏注②同論文。

㉔家持と大嬢の贈答に「人言」や「人目」に関わる表現が多いことは、小野寺静子氏(「大伴家持と坂上大嬢」『萬葉集を学ぶ』第三集)に論じられている。

(一九八七・十一・十九稿了)